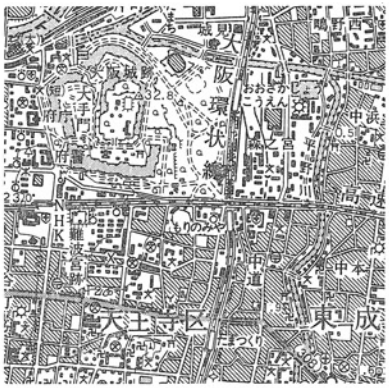
大阪・大坂城跡 (2)

1 所在地　大阪市中央区大阪城
2 調査期間　一九九二年(平4)二月～五月
3 発掘機関　㈶大阪市文化財協会
4 調査担当者　趙　哲済・松尾信裕・佐藤　隆・鳥居信子・豆谷浩之
5 遺跡の種類　城郭跡・城下町跡
6 遺跡の年代　桃山時代～江戸時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地(OS九二―七四)は大阪城公園の東南隅、天守閣からは南東一㎞足らずの距離にあり、南北約一六〇m、幅一五～一八mの南北に長い地下鉄駅舎予定地であった。当地域は、中・近世には石山本願寺の寺内町や豊臣期大坂城の三の丸～惣構の一画と考えられ、また、江戸期には玉造口定番の与力・同心屋敷地と推定されているが、その実態はよくわかっていない。



(大阪東北部)

木簡は調査地北部で検出した堀状遺構から、今回紹介するものを含めて二三点出土した。この堀状遺構は、両側に石垣をもち、幅約一三m、深さ一・三mで、東西方向に一七m以上の長さがあった。

木簡が出土した層は、遺物を多量に含む黒色の腐植質シルト薄層と砂・粘土偽礫薄層の互層で、堀状遺構を埋め立てる際に、天守閣のある堀の北側から客土されたいわゆるゴミ堆積物である。その時期は、志野を含む瀬戸美濃焼、少量の唐津焼などの国産陶磁器や青花の年代観から、豊臣期後半、一七世紀初めのある時期と考えられる。陶磁器のほか、漆器・箸・下駄・桶・木製の編物・板材・木製箆・錐・扇子・碁石・貝殻・獣骨・魚鱗など、庶民や下級武士の一般生活でも排出されるものが多い一方で、同層準からは金箔瓦や蒔絵など、当時の大名階級の道具や持ち物であったと考えられる遺物も相当量出土している。また、ゴミ堆積物には炭や焼けた木製品も混じっており、ゴミの一部は焼却されていたとも思われる。

さらに、堆積学的に観察すると、これらのゴミ堆積物は、一度どこか別の場所に投棄された後、堀の埋め立てのために二次的に持ち込まれたと考えられる層相を示している。おそらく、天守閣のある城内にあったゴミ捨て場から運ばれてきたものであろう。したがって、木簡も、城内の生活にかかわって使用されたものと推測される。

8 木簡の釈文・内容

(1)
・「□□」
・「廿□ふ　(102)×20×2.5　019　R三四

(2)
□□かや　をち□□　(228)×23×4　081　R一二〇b

(3)
「二郎十□」　86×6×5　065　R一四八

(4)
・×せい十郎」
・　□□進上」　(65)×13×3　019　R一五一a

(5)
・三人　二人
四人　一人
五人　□人
・六人
□
月

(6)
□　72×(54)×5　065　R一五一b

(7)
・「〈□□　」　26×75×1　065　R一五一c
・「〈□まい□」　89×20×4　032　R一八八

(8)
「みそおけ　四郎右」　203×40×4　061　R九七

(9)
・「〈七□の内　」
・「〈こ□なやち三」　57×14×3　032　R二二三

(10)
「〈ちよ七郎□□とし
一□」　156×31×3　032　R二四〇a

(11)
ひのき　(168)×8×7　065　R二四〇b

(12)
「〈　上」　140×30×5　033　R二四〇c

(13)
・「もろす□二」
・「九郎兵□」　61×14×2　011　R二四三

(14)
・×藤小兵衛□
・　□□　(113)×19×4　059　R二四七

(15)
「〈　おきき」　156×28×3　033　R二七七

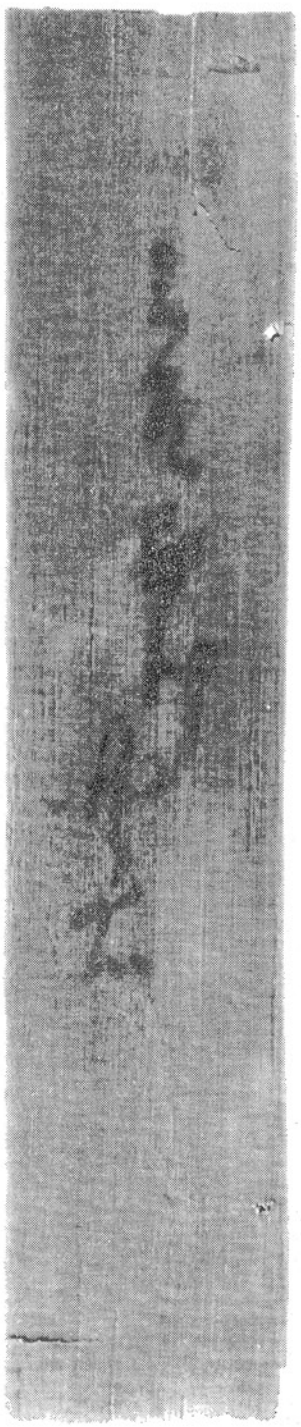
(16)
・「〈□」
・「〈□」(表裏とも彫りに墨)　38×19×3　032　R四〇三

9　関係文献

趙　哲済「森ノ宮の地下に埋もれた遺跡」(財)大阪市文化財協会『葦火』四八、一九九四年)

河村健史「大坂城跡出土の蒔絵の香道具」(財)大阪市文化財協会『葦火』四九、一九九四年)

(趙　哲済、松尾信裕、佐藤　隆、鳥居信子、豆谷浩之)



(8)

(11)

(3)

(4)

(16)

(4) R一五一a
(3) R一四八
(16) R四〇三
(11) R二四〇b
(8) R一九七

縮尺

(4)
(3)
(16) 約一〇〇パーセント

(11)
(8) 約九二パーセント

出土木簡写真